

## 学校教育におけるチーム支援に関する研究 －学校管理職と養護教諭の実態調査から－

橋口 文香<sup>\*1</sup>・境 ほのか<sup>\*2</sup>・高木 富士男<sup>\*3</sup>

<sup>\*1</sup>九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

<sup>\*2</sup>岩国市立美和西小学校 山口県岩国市美和町生見739-1 (〒740-1231)

<sup>\*3</sup>西日本短期大学健康スポーツコミュニケーション学科

福岡市中央区福浜1-3-1 (〒810-0066)

(2018年11月1日受付 2018年12月10日受理)

### 要 旨

近年、子どもの心身の健康に関わる課題が複雑化・多様化している。学校現場では、学校や教員が連携・分担する体制を整備し、学校の機能を強化していくことが求められている。本研究では学校教育における学校管理職と養護教諭が求める「チーム支援」に対する認識や考え方の差異を比較し、「チーム支援」での養護教諭に求められる資質や能力、「チーム支援」の在り方を考察することとした。調査の結果、養護教諭には「チーム支援」に対して専門スタッフ、関係者との連絡調整が重要となり、さまざまな場面でのコーディネーター的役割が期待され学校内外の人物と円滑な人間関係の構築が必要であると推測された。さらに、養護教諭は日常から学校外の人物とも関わりを持ち、さまざまな場面に必要とされる人物をコーディネートして対応していくことが必要であると考えられた。

### 1. 緒言

近年、社会や経済の変化に伴い、子どもや家庭、地域社会も変容し、心身の健康に関わる課題が複雑化・多様化している。そのため、学校や教員が連携・分担する体制を整備し、学校の機能を強化していくことが求められている。平成10年中央教育審議会答申「今後の地方教育行政の在り方について」以降、地方分権等の方向性の下、学校の自主性・自律性の確立を基調とした施策が進められてきており、平成19年には副校長、主幹教諭、指導教諭という新たな職が設置されるなど、学校の組織体制は整備されてきた<sup>1)</sup>。

特に、養護教諭に着目すると平成19年3月29日中央教育審議会答申に対する文部科学大臣諮問説明の中で、さまざまな課題に対し、一部の教員が個々に対応するだけでなく、養護教諭や栄養教諭が中核としつつ、全教職員で学校全体の取組体制を整備する必要があるとされている<sup>2)</sup>。養護教諭の職務では、学校教育法で「児童の養護をつかさどる」と定められており、昭和47年及び平成9年保健体育審議会答申において主な役割が示されてきた<sup>2)</sup>。また、子どもの現代的な心身の健康課題にかかわる対応に当たり、学級担任等、学校医、学校薬剤師、

スクールカウンセラーなどの専門職などの学校内における連携を推進し、養護教諭はコーディネーターの役割を担う必要があるとされている<sup>2)</sup>。

これらのことから、養護教諭は「チームとしての学校」の中においても、課題の解決に求められる専門性や経験を活かしたコーディネーター的役割が期待されていると考えることができる。しかし、秋光らの「学校内のチーム援助における養護教諭のコーディネーション行動と養護教諭の職務満足感に及ぼす影響」についての研究において、「チーム援助に関わる他の校内分掌担当者と比較した結果、『子どもの心身の状態把握』では援助チームの中で中心的な役割を担っていたが、それ以外のコーディネーション行動の程度は、生徒指導を除く他の分掌担当者と同程度である」<sup>3)</sup>ことが示唆された。また、平成27年12月21日中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」<sup>1)</sup>では「チームとしての学校」像（イメージ図）において、養護教諭の明記はあったものの、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとの連携・分担にとどまっており、具体的なコーディネーター的役割の明記がない。

安林<sup>4)</sup>は、学校における養護教諭の役割に関する研究において、分析対象とした管理職の言説では、常に一般教諭との対比的に語られており、「養護教諭の位置づけは不安定かつ曖昧なもの」<sup>4)</sup>であるとされている。「一般教諭からみて養護教諭の専門性や役割は、いまだ認知され難い」<sup>4)</sup>という現状が明らかになった。

そこで本研究では、学校教育における学校管理職と養護教諭が求める「チーム支援」に対する認識や考え方の差異を比較し、「チーム支援」で養護教諭に求められる資質や能力、「チーム支援」の在り方を考察することを目的とした（表1）。

表1. チーム支援の定義

「チーム支援」定義：「チームとしての学校」とは、子供たちの豊かな学びを実現するため、教員が担う業務を見直し、専門スタッフが学校教育に参画して、教員が専門スタッフ等と連携して、課題の解決に当たることとされている<sup>1)</sup>。よって、本研究における「チーム支援」については、学校のあらゆる健康課題に対し、学校の教職員や専門スタッフ、関係機関がチームとなって支援することとする。

## II. 調査方法

### 1. 調査目的

学校教育における学校管理職と養護教諭が求める「チーム支援」に対する認識や考え方の差異を比較し、「チーム支援」で養護教諭に求められる資質や能力、「チーム支援」の在り方を考察する。

## 2. 調査対象・時期

平成29年5月から7月にかけて、Y県内3つの市（A市・B市・C市）の全公立小学校（計99校）の学校管理職と養護教諭198名に対し、自記式質問紙で郵送法にて実施した。

## 3. 調査内容

項目（1）に関しては、所属、経験年数については記述を求め、学校規模については選択とした。その他の項目については、4件法を用いた。内容については現役中堅養護教諭にプレテスト（平成29年3月）を実施し、内容の不備や質問項目の追加・修正を行った（表2）。

表2. 質問紙内容

(1) 基本属性について 所属、経験年数、学校規模 ※1
(2) チーム支援に対する認知について チーム支援の認知、重要性、役割遂行
(3) チーム支援に関わる度合いについて 学校管理職、養護教諭の自己判定
(4) チーム支援の実態について さまざまな場面に対してどの教職員、専門スタッフ、関係者が関わっているか
(5) 求めるチーム支援について さまざまな場面に対して関わったほうが良いと考える教職員、専門スタッフ、関係者

※1 過小規模校（5学級以下）、小規模校（6～11学級）、適正規模校（12～18学級）  
大規模校（19～30学級） 過大規模校（31学級以上）

## 4. 分析内容

Excelで統計処理後、学校管理職と養護教諭の認識の差異についてクロス集計を行った。

## 5. 倫理的配慮

本質問紙調査は、無記名、任意とし調査結果に関しては鍵のかかる場所に厳重に保管し、研究以外の目的には使用しないことを記載した。調査対象者の回答および返信をもって本研究の同意を得たものとした。

## III. 調査結果

### (A) 学校管理職

アンケートの回収率は、99名中41名（41.4%）であった。有効回答率は41名中41名（100.0%）であった。

### (B) 養護教諭

アンケートの回収率は、99名中45名（45.5%）であった。有効回答率は、45名中45名（100.0%）であった。

### 1. 調査対象について

学校管理職（以下、「管理職」と記載）の勤務年数では、「5年未満」の割合が6.3%、

「10～20年未満」は18.8%、「20～30年未満」は74.9%であった。養護教諭では、「5年未満」の割合が23.3%、「5～10年未満」は23.3%、「10～20年未満」は14.0%、「20～30年未満」は37.1%、「40年以上」は2.3%であった。

管理職の勤務する学校の規模では、「過大規模校」は9.8%、「大規模校」は19.5%、「適正規模校」は12.2%、「小規模校」は41.4%、「過小規模校」は17.1%であった。養護教諭では、「過大規模校」は8.9%、「大規模校」は22.2%、「適正規模校」は6.7%、「小規模校」は46.6%、「過小規模校」は15.6%であった。

## 2. チーム支援の認識と実態について

表3. チーム支援の認識について

チーム支援の認知度	管理職		養護教諭	
	回答数(n=40)	回答割合(%)	回答数(n=45)	回答割合(%)
とてもよく知っている	14	35.0	8	17.8
よく知っている	17	42.5	23	51.1
よくは知らないが聞いたことがある	8	20.0	13	28.9
知らない	1	2.5	1	2.2
チーム支援の重要性	管理職		養護教諭	
	回答数(n=41)	回答割合(%)	回答数(n=45)	回答割合(%)
とてもそう思う	27	65.9	27	60.0
そう思う	11	26.8	17	37.8
まあまあ思う	3	7.3	1	2.2
思わない	0	0.0	0	0.0
チーム支援の役割遂行	管理職		養護教諭	
	回答数(n=41)	回答割合(%)	回答数(n=43)	回答割合(%)
とても果たしている	1	2.5	0	0.0
果たしている	24	58.5	21	48.8
まあまあ果たしている	14	34.1	20	46.5
果たしている	2	4.9	2	4.7

「チーム支援」の認知や重要性、役割遂行について、管理職、養護教諭に回答を求めた。「チーム支援の認知」では、「とてもよく知っている」と「よく知っている」を合わせた肯定的回答の割合は管理職77.5%、養護教諭68.9%であった。「チーム支援の重要性」では、「とてもそう思う」と「そう思う」を合わせた肯定的回答の割合は管理職92.7%、養護教諭97.8%と高い結果となった。さらに、「チーム支援の役割遂行」では、「果たしている」と「まあまあ果たしている」を合わせた肯定的回答の割合は管理職92.6%、養護教諭95.3%であった(表3)。

さまざまな場面における「チーム支援」の実態について「いじめ」では、「深く関わっている」と回答した割合は管理職70.7%、養護教諭9.1%であった。また、「やや深く関わっている」と「少し関わっている」を合わせた肯定的回答の割合は、管理職21.9%であるのに対し養護教諭79.5%であった。「特別支援教育」では、「深く関わっている」と回答した割合は管理職53.7%、養護教諭9.1%であった。「医療的配慮が必要な場面」では、「深く関わっている」と回答した割合は管理職36.6%、養護教諭79.1%であった。「心のケア」では、「深く関わっている」と「やや深く関わっている」を合わせた肯定的回答の割合は管理職87.8%、養護教諭81.8%であった。「小1プロブレム・中1ギャップ」では、「深く関わっている」と「やや

深く関わっている」を合わせた肯定的回答の割合は管理職87.8%、養護教諭36.4%であった。「薬物乱用」では、「深く関わっている」と回答した割合は管理職17.1%、養護教諭25.6%であった。「学校内での暴力行為」では、「深く関わっている」と「やや深く関わっている」を合わせた肯定的回答の割合は管理職80.4%、養護教諭45.5%であった。「保護者への介入が必要な場面」では、「深く関わっている」と回答した割合は管理職61.0%、養護教諭6.8%であった（表4）。

表4. チーム支援の実態について

	管理職		養護教諭	
	回答数 (n=41)	回答割合 (%)	回答数 (n=44)	回答割合 (%)
<b>①いじめ</b>				
深く関わっている	29	70.8	4	9.1
やや深く関わっている	8	19.5	21	47.7
少し関わっている	1	2.4	14	31.8
ほとんど関わっていない	1	2.4	3	6.8
該当なし	2	4.9	2	4.6
<b>②不登校</b>				
深く関わっている	20	48.8	19	43.2
やや深く関わっている	14	34.1	17	38.6
少し関わっている	3	7.3	13	29.5
ほとんど関わっていない	0	0.0	2	4.6
該当なし	4	9.8	2	4.6
<b>③保健室登校</b>				
深く関わっている	9	22.0	18	40.9
やや深く関わっている	17	41.5	13	29.5
少し関わっている	3	7.5	1	2.3
ほとんど関わっていない	4	10.0	4	9.1
該当なし	7	17.5	8	18.2
<b>④特別支援教育</b>				
深く関わっている	22	53.7	4	9.1
やや深く関わっている	16	39.0	23	52.3
少し関わっている	2	4.9	15	34.1
ほとんど関わっていない	0	0.0	2	4.5
該当なし	1	2.4	0	0.0
<b>⑤医療的配慮が必要な場面</b>				
深く関わっている	15	36.6	34	79.1
やや深く関わっている	21	51.3	8	18.6
少し関わっている	3	7.3	1	2.3
ほとんど関わっていない	1	2.4	0	0.0
該当なし	1	2.4	0	0.0
<b>⑥心のケア</b>				
深く関わっている	12	29.3	19	43.2
やや深く関わっている	24	58.5	17	38.6
少し関わっている	4	9.8	8	18.2
ほとんど関わっていない	0	0.0	0	0.0
該当なし	1	2.4	0	0.0
<b>⑦小1プログラム・中1ギャップ</b>				
深く関わっている	16	39.0	4	9.1
やや深く関わっている	20	48.9	12	27.3
少し関わっている	3	7.3	21	47.7
ほとんど関わっていない	1	2.4	6	13.6
該当なし	1	2.4	1	2.3
<b>⑧薬物乱用</b>				
深く関わっている	7	17.1	11	25.0
やや深く関わっている	16	39.0	12	27.3
少し関わっている	12	29.3	15	34.1
ほとんど関わっていない	4	9.8	4	9.1
該当なし	2	4.9	1	2.3
<b>⑨校内での暴力行為</b>				
深く関わっている	17	41.4	1	2.3
やや深く関わっている	16	39.0	19	43.2
少し関わっている	2	4.9	18	40.9
ほとんど関わっていない	2	4.9	3	6.8
該当なし	4	9.8	3	6.8
<b>⑩日本橋指導が必要な場面</b>				
深く関わっている	7	18.4	0	0.0
やや深く関わっている	14	36.8	6	13.7
少し関わっている	4	10.5	10	22.7
ほとんど関わっていない	8	21.1	21	47.7
該当なし	5	13.2	7	15.9
<b>⑪保護者への介入が必要な場面</b>				
深く関わっている	25	61.1	3	6.8
やや深く関わっている	11	26.8	15	34.1
少し関わっている	3	7.3	18	40.9
ほとんど関わっていない	1	2.4	8	18.2
該当なし	1	2.4	0	0.0
<b>⑫児童虐待</b>				
深く関わっている	18	43.9	9	21.4
やや深く関わっている	11	27.5	17	40.5
少し関わっている	3	7.5	7	16.7
ほとんど関わっていない	4	10.0	6	14.3
該当なし	4	10.0	3	7.1

### 3. 求められているチーム支援について

「いじめ」に対して実際に関わっている人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」、「教頭」、「生徒指導担当」、「学級担任」でそれぞれ100.0%、養護教諭は「校長」97.8%であった。さらに、管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「スクールソーシャルワーカー」で管理職45.0%、養護教諭22.2%であった。また、「いじめ」に対して関わったほうが良いと考える人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」92.1%、養護教諭は「校長」、「教頭」、「養護教諭」、「学級担任」でそれぞれ97.7%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「スクールソーシャルワーカー」で管理職60.5%、養護教諭39.5%であった（図1）。

「不登校」に対して関わっている人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」、「学級担任」でともに95.0%、養護教諭は「校長」、「学級担任」でともに100.0%であった。

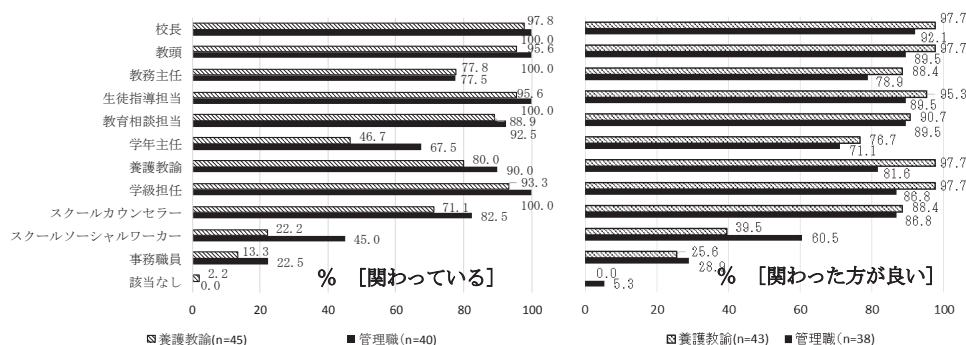


図1. いじめに対しての実態と認識

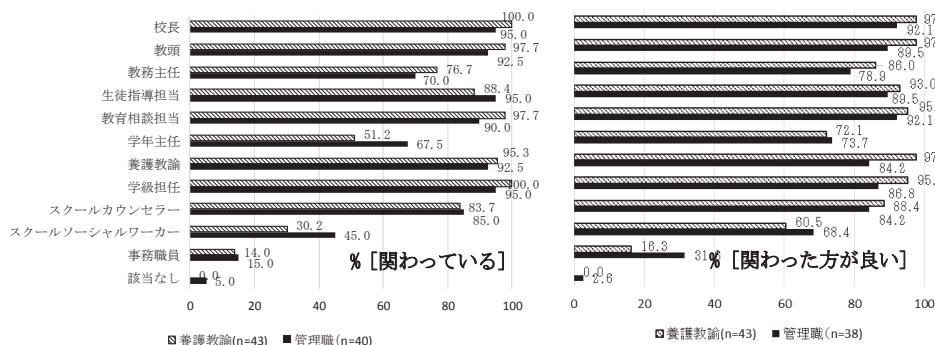


図2. 不登校に対しての実態と認識

管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「学年主任」で管理職67.5%、養護教諭51.2%であった。



また、「不登校」に対して関わったほうが良いと考える人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」92.1%、養護教諭は「校長」、「教頭」、「養護教諭」でそれぞれ97.7%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「事務職員」で管理職31.6%、養護教諭16.3%であった（図2）。

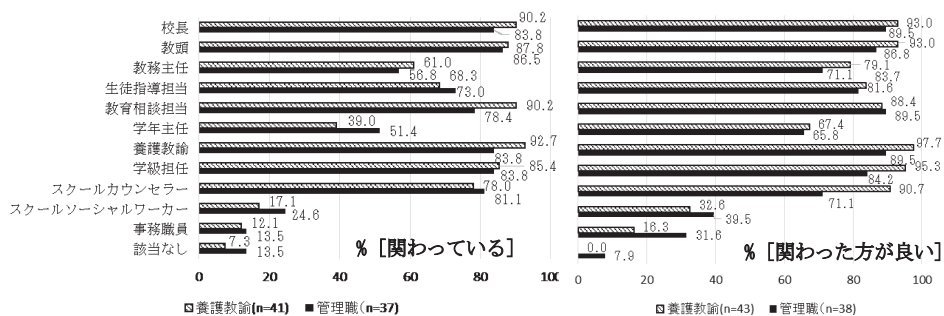


図3. 保健室登校に対しての実態と認識

「保健室登校」に対して関わっている人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「教頭」86.5%、養護教諭は「養護教諭」92.7%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「学年主任」で管理職51.4%、養護教諭39.0%であった。また、「保健室登校」に対して関わったほうが良いと考える人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」、「教育相談担当」、「養護教諭」でそれぞれ89.5%、養護教諭は「養護教諭」97.7%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「スクールカウンセラー」で管理職71.1%、養護教諭90.7%であった（図3）。

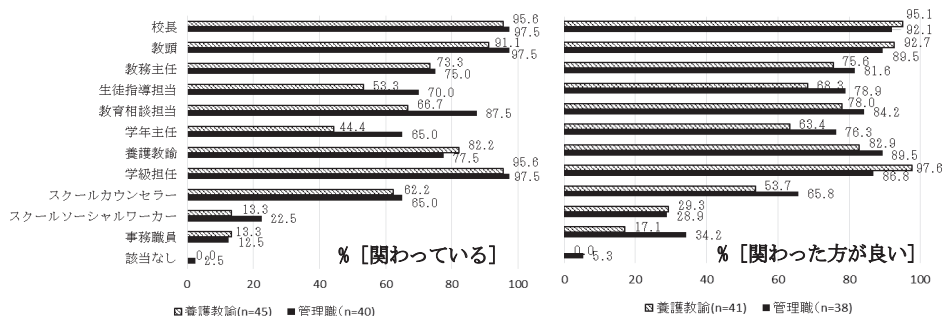


図4. 特別支援教育に対しての実態と認識

「特別支援教育」に対して関わっている人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」、「教頭」、「学級担任」でそれぞれ97.5%、養護教諭は「校長」、「学級担任」でともに95.6%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「教育相談

担当」で管理職87.5%、養護教諭66.7%であった。また、「特別支援教育」に対して関わったほうが良いと考える人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」92.1%、養護教諭は「学級担任」97.6%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「事務職員」で管理職34.2%、養護教諭17.1%であった（図4）。

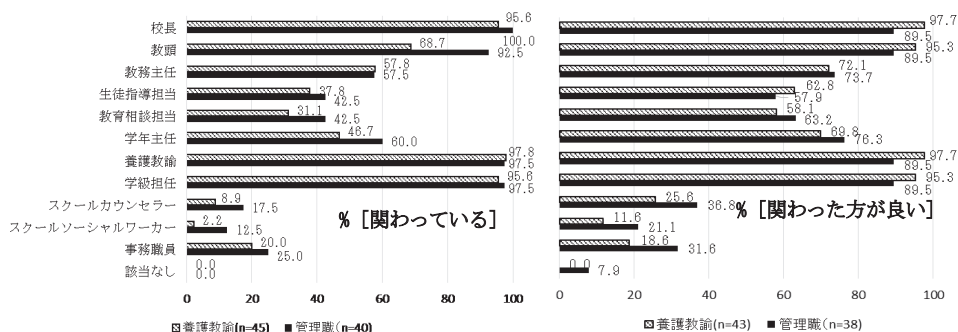


図5. 医療的配慮の必要な場面に対しての実態と認識

「医療的配慮の必要な場面」に対して関わっている人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」100.0%、養護教諭は「養護教諭」97.8%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「学年主任」で管理職60.0%、養護教諭46.7%であった。また、「医療的配慮の必要な場面」に対して関わったほうが良いと考える人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」、「教頭」、「養護教諭」、「学級担任」でそれぞれ89.5%、養護教諭は「校長」、「養護教諭」でともに97.7%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「事務職員」で管理職31.6%、養護教諭18.6%であった（図5）。

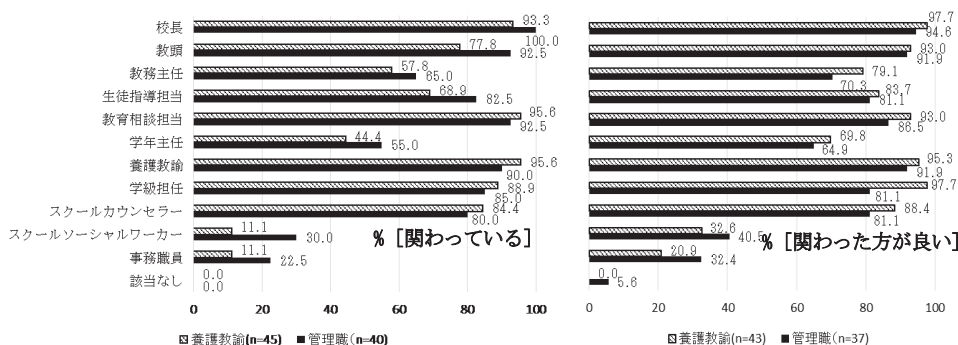


図6. 心のケアに対しての実態と認識



「心のケア」に対して関わっている人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」100.0%、養護教諭は「教育相談担当」、「養護教諭」でともに95.6%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「スクールソーシャルワーカー」で管理職30.0%、養護教諭11.1%であった。また、「心のケア」に対して関わったほうが良いと考える人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」94.6%、養護教諭は「校長」、「学級担任」でともに97.7%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「学級担任」で管理職81.1%、養護教諭97.7%であった（図6）。

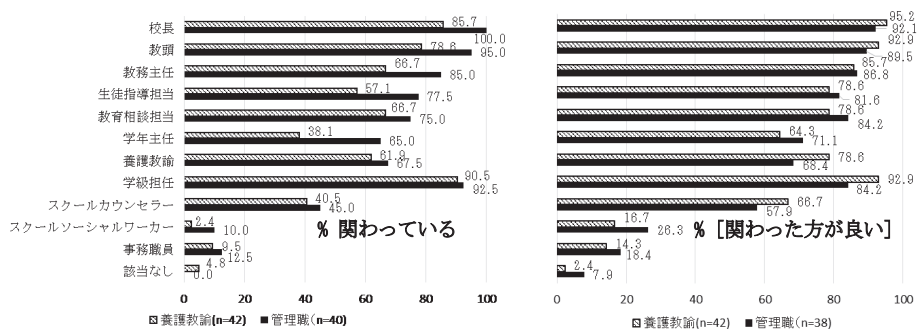


図7. 小1プロブレム・中1ギャップに対しての実態と認識

「小1プロブレム・中1ギャップ」に対して関わっている人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」100.0%、養護教諭は「学級担任」90.5%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「学年主任」で管理職65.0%、養護教諭38.1%であった。また、「小1プロブレム・中1ギャップ」に対して関わったほうが良いと考える人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」92.1%、養護教諭は「校長」95.2%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「養護教諭」で管理職68.4%、養護教諭78.6%であった（図7）。

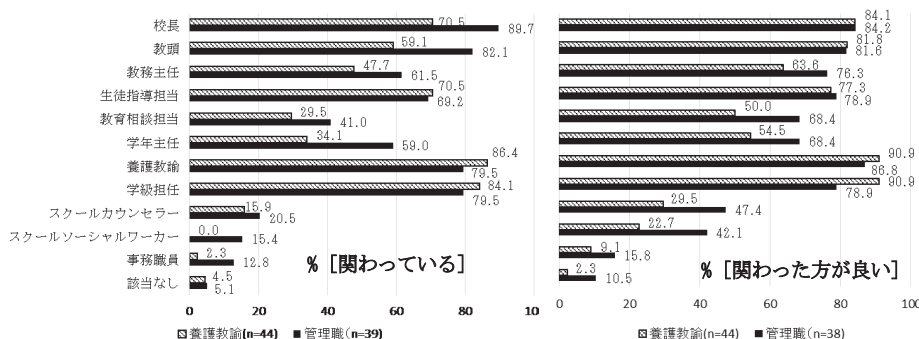


図8. 薬物乱用に対しての実態と認識

「薬物乱用」に対して関わっている人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」89.7%、養護教諭は「養護教諭」86.4%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「学年主任」で管理職59.0%、養護教諭34.1%であった。また、「薬物乱用」に対して関わったほうが良いと考える人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「養護教諭」86.8%、養護教諭は「養護教諭」、「学級担任」でともに90.9%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「スクールソーシャルワーカー」で管理職42.1%、養護教諭22.7%であった（図8）。

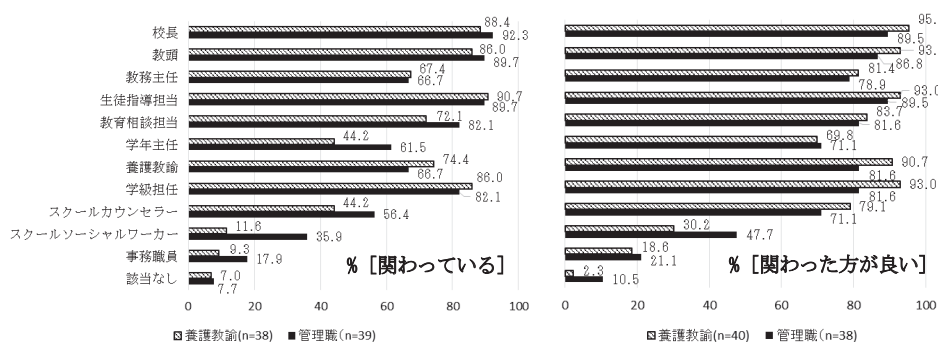


図9. 学校内での暴力行為に対しての実態と認識

「学校内での暴力行為」に対して関わっている人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」92.3%、養護教諭は「校長」88.4%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「スクールソーシャルワーカー」で管理職35.9%、養護教諭11.6%であった。

また、「学校内での暴力行為」に対して関わったほうが良いと考える人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」、「生徒指導担当」でともに89.5%、養護教諭は「校長」95.3%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「スクールソーシャルワーカー」で管理職47.4%、養護教諭30.2%であった（図9）。

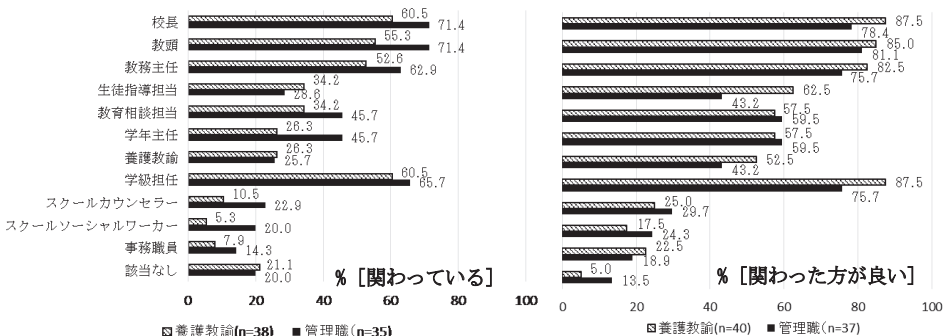


図10. 日本語指導が必要な場面に対しての実態と認識

「日本語指導が必要な場面」に対して関わっている人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」、「教頭」でともに71.4%、養護教諭は「校長」、「学級担任」でともに60.5%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「学年主任」で管理職45.7%、養護教諭26.3%であった。また、「日本語指導が必要な場面」に対して関わったほうが良いと考える人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「教頭」81.1%、養護教諭は「校長」、「学級担任」でともに87.5%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「生徒指導担当」で管理職43.2%、養護教諭62.5%であった（図10）。

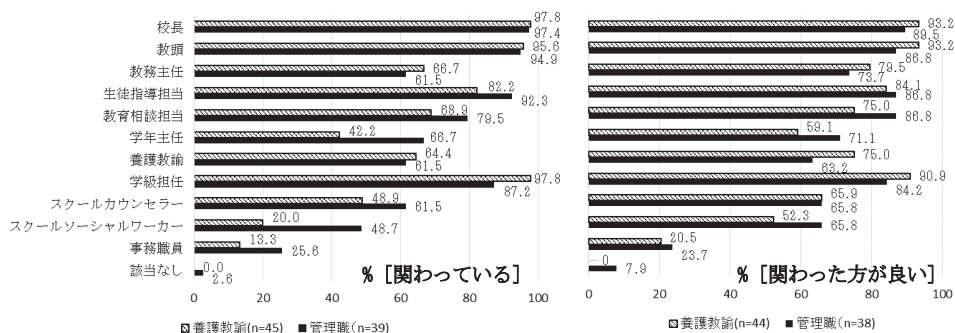


図11. 保護者への介入が必要な場面に対しての実態と認識

「保護者への介入が必要な場面」に対して関わっている人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」97.4%、養護教諭は「校長」、「学級担任」でともに97.8%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「スクールソーシャルワーカー」で管理職48.7%、養護教諭20.0%であった。また、「保護者への介入が必要な場面」に対して関わったほうが良いと考える人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」89.5%、養護教諭は「校長」、「教頭」でともに93.2%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「スクールソーシャルワーカー」で管理職65.8%、養護教諭52.3%であった（図11）。

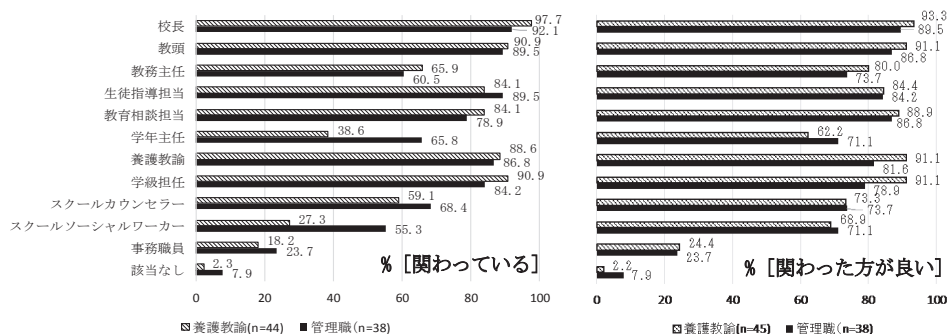


図12. 児童虐待に対しての実態と認識

「児童虐待」に対して関わっている人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」92.1%、養護教諭は「校長」97.7%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「スクールソーシャルワーカー」で管理職55.3%、養護教諭27.3%であった。また、「児童虐待」に対して関わったほうが良いと考える人物で回答の割合が最も高かったのは、管理職は「校長」89.5%、養護教諭は「校長」93.3%であった。管理職と養護教諭の回答の割合に差があった上位1項目は、「学級担任」で管理職78.9%、養護教諭91.1%であった(図12)。

現在関わっている人物と関わった方が良い人物についての自由記述に関しては、設定項目と同様と判断したため省略することとした。

## IV. 考察

### 1. チーム支援の実態について

「チーム支援」の認識についての設問では、「チーム支援の認知度」「チーム支援の重要性」「チーム支援の役割遂行」について回答を求めた。特に、「チーム支援の重要性」では「とてもそう思う」と「そう思う」と合わせて「そう思う」と回答した割合が管理職、養護教諭ともに9割にのぼった。役職に関わらず、「チーム支援」の重要性について共通理解していると考えられる。これは、学校現場におけるさまざまな問題の複雑さ多様さから、管理職、養護教諭ともにチームで行う支援の必要性を感じているといえる。

さまざまな場面別の関わりについての設問では、実際に管理職と養護教諭の関わっている度合いについて回答を求めた。管理職が「深く関わっている」と回答した項目は、「いじめ」「特別支援教育」「小1プロブレム・中1ギャップ」「学校内での暴力行為」「保護者への介入が必要な場面」であった。養護教諭が「深く関わっている」と回答した項目は、「医療的配慮の必要な場面」「心のケア」「薬物乱用」であった。管理職、養護教諭ともに「チーム支援の重要性」については同程度の認識であったが、実際の関わりについては管理職が養護教諭よりもさまざまな場面において、「深く関わっている」と回答した割合が高かった。この理由について、養護教諭の職務の特徴が影響していると考えられる。久保<sup>5)</sup>は、養護教諭はすべての教職員と円滑な関わりを持たねばならないため、謙遜した態度をとりながら教職員との人間関係を構築しており、このような態度が役割意識を低くさせていると述べている。役割意識を低くさせていることが、さまざまな場面での関わりについて「深く関わっている」と回答した割合の項目に差がみられた理由だと推察される。

場面別に現在関わっている人物について管理職と養護教諭で回答の割合に差がみられた。特に、スクールカウンセラー(以下、「SC」と記載)、スクールソーシャルワーカー(以下、「SSW」と記載)の項目では、管理職は養護教諭より高い割合であった。理由として、管理職と養護教諭のSC、SSWへの認識の差があると考えられる。「チーム支援」は、認識され期待感を持

たれつつあるが、養護教諭はSC、SSWに少なからず抵抗感を持っているのではないだろうか。養護教諭は、教育職員として心身の健康の保持増進に携わっている。しかしながら、心理面を主として扱うSCに少なからず抵抗感があると考えられる。また、SCもSSWも学校に常駐している割合は低く、養護教諭のように日常的な児童生徒の実態を把握していない現状がある。そのことを養護教諭が懸念するゆえに、管理職との認識の差が生まれたと推測できる。中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」<sup>1)</sup>においても、SCの課題として配置の確保や勤務日数が限られていることがあげられていた。SSWもSC同様、配置の拡充や勤務日数が限られていることに加え、福祉の資格を有したSSWの人材確保があげられていた<sup>1)</sup>。これらのことから、SC、SSWともに職務の特徴として外部性があるが、その外部の専門職という認識を養護教諭が持っているため、SC、SSWが「チーム支援」に関わる意識を低くしているのではないだろうか。養護教諭は、SC、SSWに関する研修に積極的に参加するなどして、意義や職務について理解する必要があると考えられる。

## 2. チーム支援における養護教諭に求められる資質や能力について

場面別に関わったほうが良いと考える人物について回答を求めた。管理職が「養護教諭」と回答した割合が高かった場面は、「保健室登校」「医療的配慮の必要な場面」「薬物乱用」であった。また、養護教諭が「養護教諭」と回答した割合が高かった場面は、管理職と同じ3項目に加え、「いじめ」「不登校」であった。管理職は養護教諭の職務の専門性を重視していると考えられる。養護教諭は、「いじめ」や「不登校」に対して高い意識を持っていることがうかがえた。中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」では、養護教諭の今後の課題として「養護教諭の専門性と保健室の機能を最大限に生かすことができる」<sup>1)</sup>としている。これらの課題が本研究でも管理職、養護教諭ともに養護教諭に求める資質、能力として示されたといえる。さらに、安林は管理職が考える養護教諭の意義に「包容力」として保健室をあげ、保健室は「心の居場所、駆け込み寺、クールダウンの場所」<sup>4)</sup>であり、それにともない保健室に在室する養護教諭は学級担任と対比的に考えられていた。このことから、管理職は養護教諭に対し学級とは異なる保健室の特色を生かした「チーム支援」の役割を求めているとうかがえた。そのため、養護教諭は医療的な知識やメンタルヘルスなど幅広い専門性が求められていると考えられる。

関わったほうが良いと考える人物で回答の割合が最も高かった項目を管理職と養護教諭でみると、管理職が「校長」と回答した場面は「いじめ」「不登校」「特別支援教育」「医療的配慮の必要な場面」「心のケア」「小1プロブレム・中1ギャップ」「校内での暴力行為」「保護者への介入が必要な場面」「児童虐待」の計9つの場面であった。管理職の校内での諸問題への対応に対する意識の高さがうかがえた。養護教諭では、管理職と同様に関わったほうが良いと考える人物で「校長」と回答した場面が最も多かった。また、養護教諭は管理職に比べ「学級担任」と回答した場面が多くあった。これは、養護教諭が「学級担任」に対して



さらに深く関わりを持つべきと考えていることがうかがえた。こうした背景として、学級担任の多忙さやチーム支援を要する判断に認識のズレがあると考えられる。中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」<sup>1)</sup>では、現在の役割分担では教員が多様な業務を担っていると示されており、業務の多忙さがうかがえる。さらに、栗原は「学校カウンセリングにおける教員を中心としたチーム支援のあり方」において、学級担任の中には「『何とかなるのではないか』『自分の学級の生徒は自分で』」<sup>6)</sup>という意識があり、チーム支援に対する抵抗の有無に関係ないと述べている。このことから、養護教諭は学級担任との関わりを日常から持ち、さまざまな場面に学級担任を巻き込みながら対応していくことが必要であると考えられる。そのため、養護教諭は多くの人との良好な関わりを築くためコミュニケーション能力が求められていると考えられる。

また、「現代的健康課題を抱える子供たちへの支援」では、養護教諭は教諭とは「異なる専門性に基づき、心身の健康に課題のある児童生徒に対して指導を行っており、健康面の指導だけでなく生徒指導面でも大きな役割を担っている」<sup>7)</sup>と述べられている。本研究での、生徒指導関連の場面として、「いじめ」「不登校」「薬物乱用」「学校内での暴力行為」「児童虐待」などがあげられる。これらの場面をみると、管理職が考える関わったほうが良いと考える教職員、専門スタッフ、関係者で、養護教諭は他の教職員、専門スタッフ、関係者と同程度であると示された。また、これらの場面で養護教諭自身が養護教諭と回答した割合は管理職よりも高いことから、養護教諭の意識が高いにもかかわらず、管理職に認知されていないと考えられる。さらに、養護教諭は生徒指導の場面に関わっていないながら、その実態が保健室で行われており管理職には見えづらいのではないだろうか。安林は、管理職のまなざしから捉える養護教諭の問題点として「閉鎖性」をあげている。養護教諭は一人職であり、他の教育教員との関わりが少ないため、「保健室の内部は可視化されずチェック機能も働きにくい」<sup>4)</sup>とあった。養護教諭は学級とは異なる保健室の特性を生かしつつ、保健室での養護教諭の活動を目に見えるものとする必要があると考えられる。

### 3. チーム支援の在り方について

場面別の現在関わっている人物と関わったほうが良いと考える人物を比較し実態と理想の差を求めた。管理職、養護教諭ともに「SSW」の差が多くの場面であげられた。SSWは現在、認知されつつあるが資格や役割などは不透明であり、人材の確保が難しいため、配置が十分ではないと考えられる。中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」<sup>1)</sup>においても、SSWの財政事情を課題として述べている。これらのことから、こうした学校を取り巻く都道府県、市町村が抱える「SSW」の課題が、本研究でも実態と理想の差によって示された。さらに、養護教諭が「SC」と連携をとることで教育相談が円滑に進められた事例<sup>8)</sup>もあり、「SC」などの専門職との連携は重要であるといえる。よって、養護教諭は「チーム支援」に対して専門スタッフ、関係者との連絡調整が重要となってくる



と考えられる。さらに、養護教諭はさまざまな場面でのコーディネーターの役割が期待されており、学校内外の人物と円滑な人間関係の構築が必要であると推測された。養護教諭は、日常から学校外の人物とも関わりを持ち、場面別に必要とされる人物をコーディネートして対応していくことが必要である。また、チームで支援することでさまざまな健康課題を多面的・多角的に捉え、児童生徒が抱える課題の早期発見・早期対応につながると考えられる。

## V. 総括及び結論

本研究では、学校教育における管理職と養護教諭が求める「チーム支援」に対する認識や考え方の差異を比較し、「チーム支援」で養護教諭に求められる能力や資質、「チーム支援」の在り方を考察した。

### 1. チーム支援の実態について

「チーム支援」の重要性は管理職、養護教諭ともに重要であると考えているが、実際の関わりでは管理職の方が養護教諭よりも多くの場面で深く関わっていることがわかった。

### 2. チーム支援における養護教諭に求められる資質や能力について

管理職は養護教諭に対し職務の専門性を重視しているとわかった。具体的には、学級とは異なる場である保健室の有効な活用があった。また、養護教諭自身は学級担任の関わりを強く望んでいることから、学級担任と日常的な関わりを持つコミュニケーション能力が重要であるとわかった。さらに、さまざまな場面に学級担任を巻き込みながら対応していくことが必要であると考えられる。

### 3. チーム支援のあり方について

現在の学校を取り巻く都道府県、市町村が抱える「SSW」の課題が本研究でも理想と現実の差によって示された。養護教諭は、日常から学校外の人物とも関わりを持ち、場面別に必要とされる人物をコーディネートして対応していくことが必要である。また、チームで支援することでさまざまな課題を多面的・多角的に捉え、課題の早期発見・早期対応につながると考えられる。

本研究は限られた地域、校種の管理職と養護教諭を対象としており、得られた結果には限界がある。今後は、質問紙の内容を精選し調査対象を広げ、管理職と養護教諭が求める「チーム支援」に対する認識や考え方の差異を比較し、「チーム支援」で養護教諭に求められる資質、能力、「チーム支援」の在り方について深めていく必要がある。

さらに、養護教諭のコーディネーター的役割があり、チーム支援を具体的に進めていくためにどのようなコーディネーション能力が必要であるか考えることやどのようにコーディネートしていくか対応を考える必要があるだろう。

## VI. 謝辞

本研究を進めるに当たり、ご多忙中にも関わらず調査にご協力いただきました、Y県A市、B市、C市の管理職と養護教諭の皆様にご心より感謝申し上げます。

## VII. 参考文献

- 1) 文部科学省、中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」、(2015)
- 2) 文部科学省、中央教育審議会答申「子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について」、(2006)
- 3) 秋光恵子、白木豊美、チーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力・権限が養護教諭の職務満足感に及ぼす影響、教育心理学研究、58 (2010) 34-45
- 4) 安林奈緒美、保健と教育が交錯する場における養護教諭の役割－管理職へのインタビュー調査を手掛かりにして－、保健医療社会学論集、23(1) (2012) 74-84
- 5) 久保昌子、養護教諭の職務への期待に関する調査研究－養護教諭の役割意識と教職員の役割期待との比較－、学校保健研究、58 (2017) 361-372
- 6) 栗原慎二、学校カウンセリングにおける教員を中心としたチーム支援のあり方－不登校状態にある摂食障害の事例を通じて－、教育心理学研究、54 (2006) 243-253
- 7) 文部科学省、現代的な健康課題を抱える子供たちへの支援－養護教諭の役割を中心として－、(2017)
- 8) 相楽直子、石隈利紀：教育相談のシステム構築と援助サービスに関する研究－A中学校実践を通じて－、教育心理学研究、53 (2005) 579-590

## **Team Support in School Education -From Status Survey among School Managers and Yo-go Teachers-**

Fumika HASHIGUCHI<sup>\*1</sup>, Honoka SAKAI<sup>\*2</sup>, Fujio TAKAKI<sup>\*3</sup>

<sup>\*1</sup>Department of Childhood Care and Education Kyushu Women's Junior College

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

<sup>\*2</sup>Iwakuni City Miwanishi Junior School

739-1, Miwamachi ikumi, Iwakuni-shi, Yamaguchi-ken 740-1231, Japan

<sup>\*3</sup>Department of Health and Sports Communication Nishi-nippon Junior College

1-3-1, Fukuhama, Cyuou-ku, Fukuoka-shi 810-0066, Japan

### **Abstract**

In recent years, issues related to the physical and mental health of children have grown increasingly complicated and diverse. Schools are expected to develop a system of coordination and role-sharing among themselves and teachers in order to enhance their functions. This study compared differences in recognition and line of thought related to “team support” in school education between school administrators and Yo-go teacher in consideration of qualities and abilities required of nursing teachers engaged in “team support” and the method of implementation. As a result of the study, it was found that liaison and coordination with specialized staff and other stakeholders are important elements for nursing teachers engaged in “team support” and the role of coordinator is expected of them in various situations, for which they need to develop a harmonious relationship with people inside and outside of school. Further, it is considered that Yo-go teachers need to have contacts with people outside of school on a daily basis in order to coordinate necessary people for various situations.

**Key word :** Team Support, School Managers, Yo-go Teacher, Status Survey, School Education